

フェルメールのカメラ

フィリップ・ステッドマン著

オランダの画家フェルメールの遺した数少ない作品のほとんどは、静かな室内を描いたもので、光が結晶したようなその画面は見る者を惹きつけてやまない。

この画家は、カメラの前身であるカメラ・オブスクラという一種の針穴写真機を用いて制作したのではないかと言われてきた。しかし、これを否定する研究者もおり、用いたとしても参照する程度であったという意見も有力である。フェルメールほどの巨匠が機械に頼るはずがないという天才信仰もこの意見を後押ししていた。

本書の著者は建築学者らしく、フェルメールの描いた室内を忠実に再現しようとし、6分の1のミニチュア空間を作ってそこに同じような光を当てた。その結果、フェルメールの絵では、床の格子模様や家具の遠近法がきわめて正確であるだけでなく、壁や床に落ちた影も現実とほぼ同じものであることを突き止めた。

巨匠の制作方法 実験から探る

さらに、6点のフェルメール作品において、部屋の情景をカメラ・オブスクラによって後ろの壁に投影した像は、実際の絵の大きさとぴたりと一致することを発見。こうした様々な実験と精密な観察により、フェルメールはカメラ・オブスクラの像をなぞって描いていたと断定する。細かな疑問は尽きないものの、この証明は概ね納得できるものであった。

フェルメールのカメラ・オブスクラは従来考えられていたような箱型の小さな器具ではなく、部屋の片隅にテントの暗室を作り、そこにレンズを設置したものであると推測。そこに映る像は倒立していたが、画家はこれを巧みに写しとったという。

この厄介な制作方法からは、フェルメールの画風だけでなく、その極端な寡作ぶりも説明できるだろう。もし彼が写真の発明以後に生きていたら、写真を撮ってはいなくても、これほど苦心して絵など描かなかつたにちがいない。彼の芸術は、草創期の科学技術と画家の才能とがぶつかって生まれたまさに奇跡であったと感得した。

器具を用いて制作したからといって、フェルメール作品の魅力がいささかも減るわけではない。フェルメールのファンにとっては知的刺激に富む1冊である。



(鈴木光太郎訳、新曜社・3000円)

▼著者はロンドン大教授。専門は建築学など。

神戸大学准教授 宮下 規久朗